第 59 回　出雲神話の「八岐大蛇」と災害

IT 生

先日、出雲神話の取材で現地を訪れた。天界を追われたスサノヲノミコトが八岐大蛇を退治し、救った女性をめとるという話だ。その舞台は、宍道湖まで１５０キロにわたる斐伊川ということになっている。

出雲の斐伊川流域各地にみられる八岐大蛇のモニュメントのひとつ

八岐大蛇の正体は何かという解釈はいくつかあるが、そのひとつに、蛇のようにくねる斐伊川がたびたび氾濫し、流域の稲田を流すことを、八岐大蛇として表現したのだというものがある。その氾濫の原因が、風雨による自然現象ではなく、流域で古来盛んだった、砂鉄による製鉄の過程で生じる、土砂だというのだ。流域の山の地質は真砂であり、その真砂を崩して、砂鉄だけを採集するのだが、その過程で大量の土砂が、上流から下流に流される。その土砂が、流域に堆積して、河川氾濫の原因になるのだという。いわば人工の災害だ。

そういえば、近年世界各地で、人工地震が多発しているという。米国では、シェールガスの採集に伴う地震が増えているとか、韓国では水を地下に注入して、地熱で生じた蒸気で発

電する際に、地震が起きていることが分かっている。地質の研究者によると、地面は固いようにみえて、実は微妙なバランスのもとに均衡が保たれているのだという。そこに人為的に水を注入するとバランスが崩れ、人工地震が起きるのだという。雪解けの春先に地震が多いという見方もあるという。出雲神話が、現代も神楽として語り継がれている背景には、自然からの警告という意味　あいもあるだろう。

今年終戦から７５年たつが、いまだに、そのショックから「神話＝右翼＝反平和」と決めつける姿勢は、もはや災害とはいえないか。

（令和２年６月）